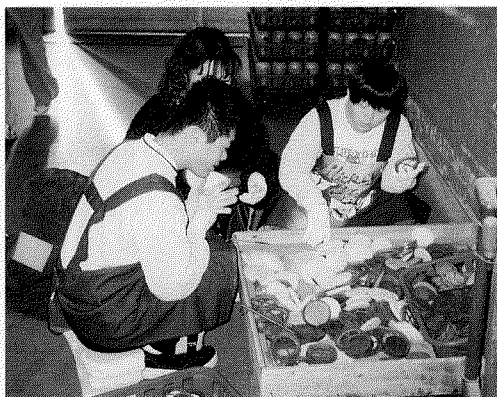


とで一日を通して仕事ができるようになった。

②仕事内容は、中学部や校内実習で行ったえのきだけのキャップの交換であったので、会社に行っても困ることなく自信を持って仕事をする事ができた。

③会社の人とお茶の時間やお昼の時間に家のことや好きな歌のことで話をする事ができた。障害に対する理解も少しずつ進み、お客さんということではなく、仕事の仲間として作業を進める雰囲気が生まれてきた。



※現場実習の前に、ほぼ同じ仕事を校内で実習し、自信を持って仕事ができる体験をしたい。お茶の時間など仕事以外で会社の人と関われる時間を確保する。

「K生もかわいそうだ」(2学期まとめの会の準備場面で)

活動A-12月

お誕生会を前に、H生と同じクラスのK生は、お母さんが注意したことがきっかけで、1週間ばかり学校へ来なくなってしまった。このことについて、H生は、「K生は、ぼくに嫌なことするから不登校になったほうがいい」と言い出した。他の生徒から「そういうこともあるけど自分も同じ様なことやってるんじゃない?」「K生は、クラスの仲間じゃん」といわれたが、H生は、考えを変えようとしなかった。



次の日、個人的に話をすると気持ちも落ち着いてきたこともあり、「K生もかわいそうだ」「家の人だって悲しい気持ちだと思う」といい出した。そして、「K生にされた悔しい思いがある時は、そう言っちゃったんだけどよく考えてみるとK生も大変だから」と考えるようになった。

※H生の気持ちが落ちついたときにもう一度考え、ゆっくり話し合い、H生が自分の考えを振り返る場面を作る。

「ぼくの計画のここをカットしていいよ」

活動A-12月

(2学期まとめの会の計画のための話し合い場面で)

2学期のお誕生会についての計画を話し合っていたとき、T生は「誕生会なんか俺したくない」と強い口調で言った。話し合いは、みんなでやろうよと考えるH生とそんなことはしたくないというT生の考えが変わらず、気まずい雰囲気が流れた。しばらくするとT生は、「みんながやりたければ、やったら。俺は、見ているから」と少しずつ折れ始めた。

H生は、「全員がやろう」という気持ちにならないと意味がないというアドバイスをもらって、自分のやりたい内容を一部カットして計画を作った。2分でできるモコモコというお菓子作りとなったが、作り方が簡単で見ている目の前でできあがり、生徒達は満足した様子であった。



※自分と違った考えの人がいるとこと、自分の考えたことは全てできるのではないということを感じ取りたい。

6 評価

(1) H生の成長から

① 自尊感情の育ち

作業活動や現場実習を通して「学校祭の販売のために」「買ってくれた人が使いやすいように」「一緒に仕事をしてくれた人がありがとうと言ってくれた」等、仕事に対して自分なりの意義を見いだすことができるようになってきた。特に、現場実習で会社の人から「仕事をしてもらってありがとう」と言っていた経験がH生の自信につながっている。社会を意識し、そこに出ていこうとする意欲作りをすることができた。さらに実習体験を積み「対人関係」「公的交通機関の利用」「根気強さ」「体力」等をつけていきたい。

② 共生意識の育ち

H生は、楽しいクラスにしたいと願って中学部で経験したクラス長を希望した。クラス長としてお誕生会を計画する中で、自分がやろうと考えたことを発表できたが、周りの生徒たちは、お誕生会を望まない生徒もいた。その考えを聞いた時、自分の考えを削って全員が満足できる方法を選ぼうとすることができた。自分が思ったことは、その通りにしたいという気持を持ちつつ、周りの人と協調することができるようになってきた。また、同じ地域に住む同世代の人と交流することを通して初対面でも「挨拶をしよう」「自分を表現しよう」と思うようになってきている。恥ずかしさや緊張はあるものの最後まで話そうとする姿勢が育ってきている。

(2) 学級活動を通して

「クラス全員でやろう」「自分達の手で進めよう」「一人一人のことを大事に考えよう」という姿勢で子供たちに接することで子供たちとともにクラスの和を考えることができた。特に、話し合いの場面で一人一人の具体的な思いを聞き合うことそしてその考えを大切にしようことでの心の交流が図られた。

(3) 現場実習を通して

自分の力で通勤する。会社の中で、会社の人と本物の仕事をやりとげることで仕事ができただという自信につながっている。特に、会社の人から自分のやっている仕事を認めてくれた時に「仕事ができただ喜び」を感じることが出来た。自分がした仕事は他の人のために役だつという仕事の一番根本的な体験をすることができた。

休憩の時間など引率職員が、プライバシーに配慮しながら、子供の様子について話をすることにより生徒の障害について理解を深めていただくことができた。甘やかすことなく一人前と認め、一緒に仕事をしていこうとする気持ちになってくれる方々がいることがうれしいことであった。

(4) 交流を通しての成果

交流相手校のY生は、一年間の交流を振り返って次のような作文を書いている。

……略……交流会に参加するようになってから私の中で一番変わったことは、障害のある人への見方です。今までは、どうしても障害のある人はかわいそうというような思いがありました。しかし、養護学校の人たちを見ていると障害のない人となんら変わらないことやかわいそうでも何でもないということを感じました。今まで私は差別を含んだ目で見ていたのかも知れません。現在は、特別な目で見るということがなくなってきました。……略……

交流活動を進める前に「障害について難しい説明を聞き、何をどう配慮していく方がいいのか」を考えあうのではなく、まず楽しく無理なく共同作業ができる内容を大事にしたい。そしてその活動を十分堪能することを通し、人間関係を深めさせたい。

障害のあるH生が生活していく将来の状況を考えた時、保護者の応援は、不可欠であるが、H生の周りにいる人々が、いかに彼を理解し共に生きようと考えてくれるかが課題となる。この意味で、交流教育は重要である。一人でも多くの人たちが、共に生きていくことに関わりの持てる学習に取り組むことが必要である。

